

第36回

作文・図画コンクール作品集



ごはん お米とわたし



目次

◆ごあいさつ.....	1
JA岩手県中央会 会長 田沼 征彦	
◆図画部門入賞作品.....	2
◆作文部門入賞作品.....	8
◆総評.....	14
審査委員長／岩手県教育委員会 委員長 八重樫 勝	
◆図画部門を審査して.....	14
前岩手県国公立幼稚園協議会 会長 伊藤 満久	
◆作文部門を審査して.....	15
盛岡市教育委員会学校教育課 指導主事 及川 公子	
◆コンクール入賞一覧.....	16
◆コンクール概要.....	20



いんあつわん

じえいえいいわて けんちゅうおうかい
JA岩手県中央会

かいちよう
会長 田沼征彦
たぬま ゆき ひこ

第三十六回「ごはん・お米とわたし」作文・図画コンクールに、作品をご応募いただきましたみなさまに厚くお礼を申し上げますとともに、入選された方々には心からのお祝いを申し上げます。

このコンクールは、小・中学生のみなさまに、主食であるお米・ごはんの大切さや稲作、ひいてはわが国の食料、農業に対する関心や理解を一層深めてもらうことを目的に開催いたしております。

三十六回目を迎えた今回も、県内各地から作文百八点、図画二百七十六点もの力作が寄せられました。この中から全国コンクールにおいて、作文部門二点、図画部門二点が優秀賞に入選いたしました。

近年、わが国における農業は、TPP（環太平洋連携協定）という貿易等に関する問題で大変厳しい状況にあります。アメリカやオーストラリアなどの広大な農地を持つ国からお米や牛肉などの農畜産物が輸入されたら、わが国の農業は大いに打撃を受けてしまいます。また、地域の田んぼや農地は荒れ果て、取り返しがつかなくなる可能性があります。今でさえ、食卓にならぶ食べ物の6割は輸入に頼っており、食料自給率がこれ以上、低下することは、日本人の食生活を危うくすることになってしまいます。

こうした「食」をめぐる状況のなかで、JAグループでは、これらの日本人にとって「よい食」とは何かを、消費者のみなさんと一緒

になって考えて行動しようと、「みんなのよい食プロジェクト」を立ち上げ、全国的に取り組みを進めております。「食」の未来をつくることは、日本の未来をつくることにつながります。その中心となるのが、日本の食文化を築いてきたお米であります。

みなさんから寄せられた作品を拝見いたしますと、今年は特に東日本大震災があつたことから、お米や食料に対する大切な思い、家族や地域の人たちとの「絆」の強さなど、いずれも純粋な目での確にとらえ、日頃の体験や出来事が描かれておりました。子どもたちの純粋な感性が、作文や図画作品を通じて表現されているのが、このコンクルの大きな特徴です。

このコンクールを通じて、家族や友人を大切にする心、地域の人たちへの感謝、伝統ある食文化への敬意、そして心を込めて育てたお米のおいしさや農業への素晴らしさに気付き、考えるきっかけになってくれることを切に願っております。

最後に、小・中学生のみなさまの豊かな心を育んでいくためにも、学校の先生方をはじめ、関係するみなさま方のご支援とご協力により、このコンクールをますます発展させていただきますようお願い申し上げます。ごあいさつとさせていただきます。

図画部門

ぜんこくゆうしゅうしょう
全国優秀賞
いわてけんきょういくちょうしょう
岩手県教育長賞

「お昼のひととき」

い とう かん な
伊 藤 栞 那
もりおか しりつみるまえちゅうがっこう
盛岡市立見前中学校 2年



図画部門

ぜんこくゆうしゅうしょう
全国優秀賞
いわてけんちじしょう
岩手県知事賞

「田んぼの草刈り」

きく ち みな み
菊 地 南 美
おおふなとしりつおきらいしょうがっこう
大船渡市立越喜来小学校 5年



図画部門

じえい いわて けん ご れん かい ちようしょう
JA岩手県五連会長賞

「大きいおにぎりいただきまーす」

こまつ だいら ゆ ら
小松平 夢 愛

はなまき しりつうちかわ め しょうがっこう おん
花巻市立内川目小学校 2年



図画部門

とうほくのうせいきよくもりおか ち い き
東北農政局盛岡地域センター長賞

「お母さんのお弁当」

おお つ か ほ
大 津 果 穂

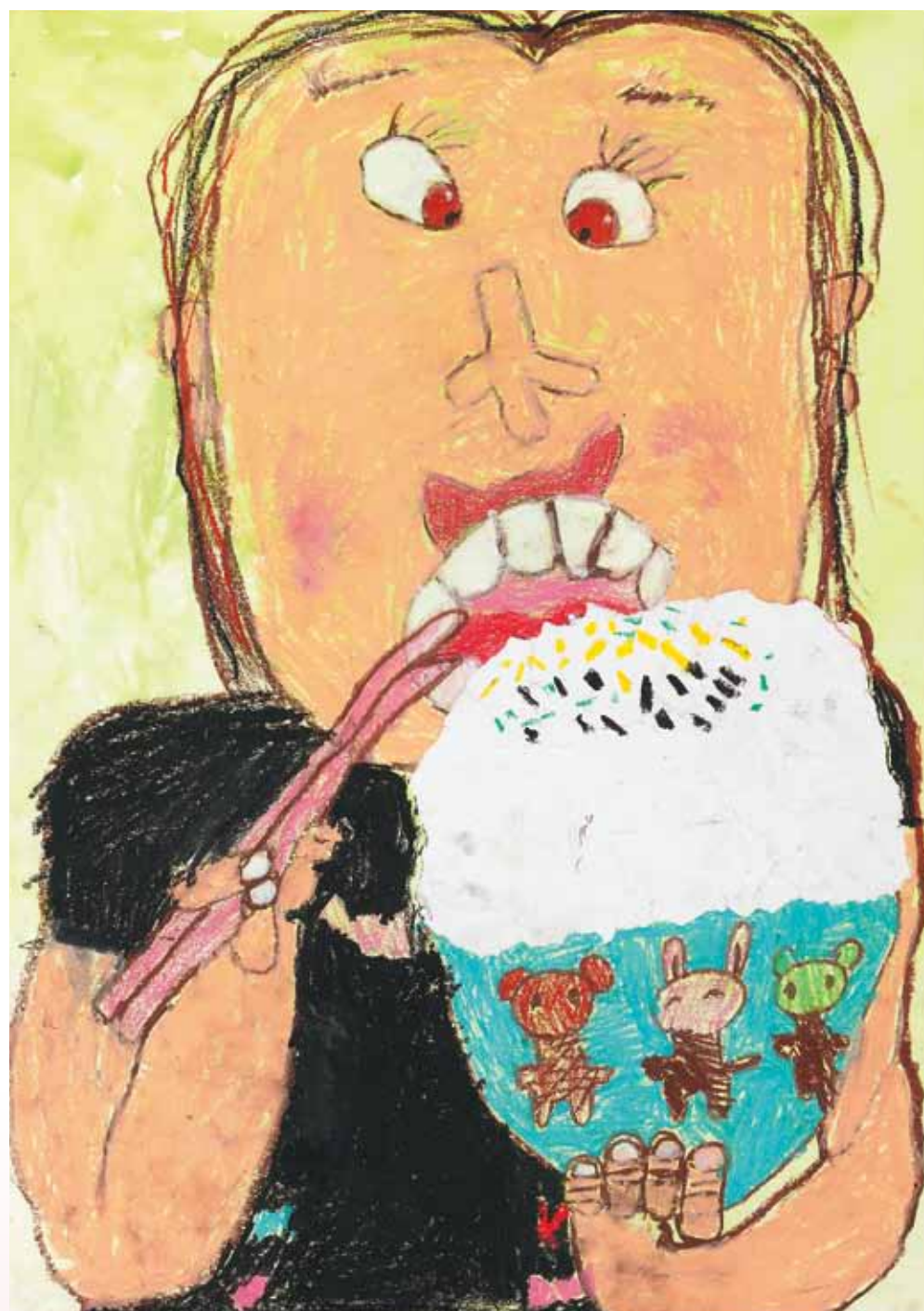
おおふな と しりつ お き らいしょうがっこう おん
大船渡市立越喜来小学校 5年



「いっただきまあす！」

あわ っ ふう か
栗 津 楓 夏

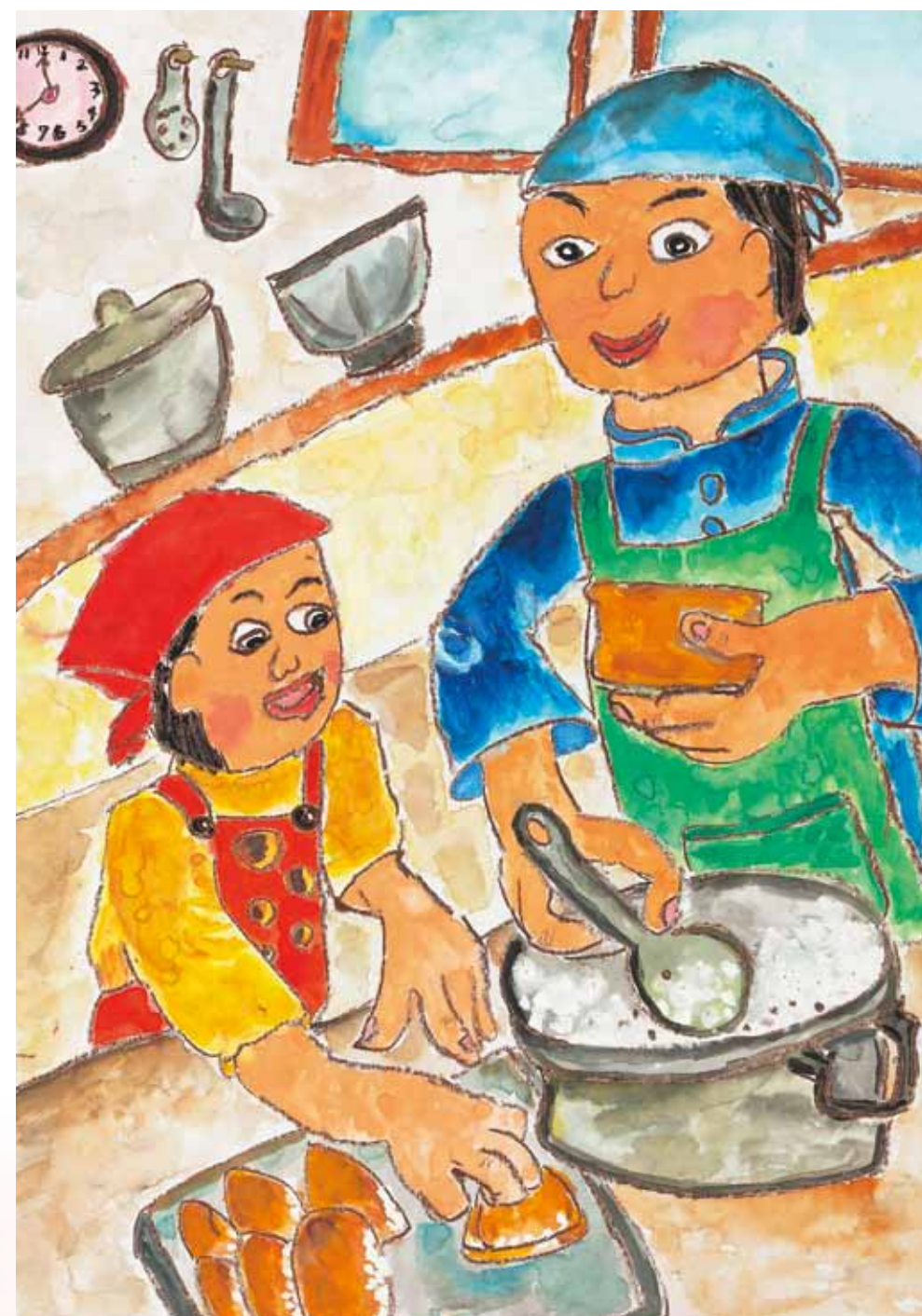
みやこ しりつあかましようがっこう ねん
宮古市立赤前小学校 1年



「いなりずし作り」

すず き
鈴 木 かれん

おうしゅう しりつしらやましようがっこう ねん
奥州市立白山小学校 6年



「米を守る。」

さとう ひかる
佐藤 光
みやこしりつせんたくしょうがっこう
宮古市立千徳小学校 6年



お米は、八十八の手間をかけるといわれます。八十八の手間では、すまないのではないかと、私は思います。私達の学校では、五年生の時にお米を育てます。ゲストティーチャーといって、本当にお米をつくっている農家のおじいさんが、先生になって、お米が出来るまで指導してください。自分たちで、稲を植え、水をやり、収穫して、いただきました。それだけでも、結構大変でした。でも、夏休みの間など、実はゲストティーチャーのおじいさんが、スズメよけの網をはってくださったり、ずっと知らないところでも、面倒をみてくださっていたことを知っています。私達のそだてた米は、もち米だったので、秋にはおもちにしてみんなで食べました。

私達は、いつもならスーパード、おもちをかって食べていたので、ずいぶんいいとこどりをしていたんだなあと感じました。おもちを食べるのに、六か月もかかるなんて：と思ひながら、おもちを食べました。

最近のニュースでは、お米への原発の被害への心配を取り上げています。私は、そのニュースを、消費者側としてではなく生産者側として見てしまっています。

あれだけの手間をかけ、愛情をもって育てたお米が、もし消費者にとけられないとなったら、農家の人は経済的だけでなく心情的にもどれだけのいたでをうけるのだろうと思うからです。

いい作物をつくるためにはいい土壌が必要だということ。農家の人は、いい土をつくるためにいろいろな研究と工夫を重ねています。この岩手の土地で、おいしいお米をつくるため、昔の人は研究し試行錯誤しながら、品種改良を進めてきたことを社会で習いました。今に至るまで、

「米の国 日本の未来」

おの でら しょう こ
小野寺 翔 吾
かるまいちゅうりつ こがるまいちゅうがっこう
軽米町立小軽米中学校 2年



僕の住んでいる街、「軽米」は町中に緑があふれた美しい町です。特に夏は、青々とした米の苗が一面に広がっていて、見ていると爽やかな気持ちになります。

僕の家でも、毎年祖父母が米を育てています。僕は犬の散歩をしながら、毎朝、田んぼの様子を見ることが出来ます。日々、成長していく苗を見るのは、僕の毎日の楽しみの一つです。そして、「たった二人でここまで育てるなんてすごいなあ」といつも思うのです。祖父母は、休むことなく、田んぼの様子を確認し、水の高さを調整したり、雑草を刈ったり、手間と時間をかけて稲を育てています。夏の炎天下での草刈りは特に大変そうです。苦勞しながら米を作ってくれるおかげで、僕は毎日、おいしいご飯を食べることが出来ます。

ところが、この我が家の田んぼに昨年、大きな変化が起きました。三反五畝ある田んぼの内、二反で飼料米を育てることになったのです。祖母に理由を聞くと、「パン食や輸入米が増えて、国で米が余ってしまった」のだそうです。僕は、この話を聞いて、今まで米が余っていることをなんとなくは知っていたけれど、それは、他でもない自分の身近に起こっている問題なんだと初めて気づきました。

確かに、昔に比べると、米を主食として食べる機会は減ってきているかもしれません。実際、パン食も増加しているし、僕自身、休みの日の昼食に手軽に作れるラーメンやスパゲッティなどの麺類を食べることも多いです。学校で食べる給食も、週に二日は御飯以外が主食です。食の多様化によって、人の好みも変わってきているのもわかりますが、僕は、このまま米を食べることが少なくなると、やがては米を食べる習慣すらも、失われていくのではないかと不安がわいてきました。

僕は、小学校五年生の時、実際に米作りを体験させていただいたことがあります。暑い中での田植えは、途中で投げ出したくなるくらい大変だったことを今でも覚えています。そこで作ったのは「古代米」と呼ばれるもので、白米とは違って、赤や紫などの色を持った米でした。食べてみると、普段食べている米とは違い、独特の香りと風味がして、とてもおいしかったです。学校の授業で調べると、「古代米」は、農薬が残りやすく、稲の草丈が長いので倒れやすいなど、育てるのが大変難しいものであること、だから、現在ではほとんど生産されないことがわかりました。

こんなにおいしくても、さまざまな理由で作られなくなる米がある。もしかしたら、僕が今食べている白米も、同じ運命をたどるかもしれません。

日本の主食として親しまれている米は、日本の「和のイメージ」を代表する食べ物です。かめば甘みが出ます。焼き魚などの和食にも、ハンバーグなどの洋食にも合う素晴らしい食べ物です。僕は、毎日の食事から米が消えていってほしくありません。ずっとつないできた米の歴史を、とぎれさせることなく、次の世代の人にも残していきたいです。そして、ふるさとはずっと、米の緑にあふれる場所であってほしいと思います。

今年、僕の家の田んぼに起こった変化をきっかけにして、僕は米について考えることが出来ました。そして、いつも身近にあったけれど気づかなかった問題にも、気づくことが出来ました。僕は、米に、真剣に、向き合っていくことが大切だと思います。そのために、まずは、ニュースなどをしっかり見て、関心を高めることから始めたいと思います。

ずっとずっと前から努力は積み重ねられてきていたわけですから。

その長い歴史をおびやかすような事故。土が汚染されるということとは、今ある農家の人達だけでなく、ずっとずっと昔から農業にたずさわってきた人達の努力すら、ふみにじることになります。

せっかくそだててきたこの技術と事業のことを考えると、私でさえも不安でたまらなくなりました。農家の人の心は、どれほどのことかと思ひます。

心配なく、農業ができる世の中。安心してお米を食べることのできる世の中。生産者も消費者も一緒にあって、守りつづければなりません。八十八もかけた手間を無駄にさせないよう私達が出来ることはなんなのか、私はずっと考え続けています。答えはいまだでていません。でも、努力を続けている農家のひとのために、わたしはそれを忘れないよう考え続けるつもりです。



「特別な米」

さ さ き え り か
佐々木 恵利佳

りく ぜん た か た し り つ よ ね き し ょう が っ こ う ね ん
陸前高田市立米崎小学校 5年



平成二十三年。今年収穫される米は、私にとって特別な意味がある。

その一つは、「自分達が作った米」だということ。私は、五年生になるのを待ちに待っていた。それは、米作りができるからだ。私の姉も兄も米作りを体験している。二人とも

「自分達で作った米は、おいしいよ。」と話していたのでうらやましかった。

いよいよ田植えの日。とてもいい天気だ。農家の方から植え方を教えられ、いざ田んぼへ。素足で入る田んぼは、にゅるっとした感覚が気持ちいい。土に、足が、とられそうだった。イネを五本ずつ、根付くように植えていく。みんな大さわぎだ。私は、こんな細い苗が、これから育っていくのかとても心配になってきた。ちよつと力を入れると折れそうな苗。手で植えたので、ちよつぱり曲がってしまったが、どうにか終了。田んぼには、三十一人分の足跡がくつきりと残っていた。

次の日から、田んぼを毎日のように観察をした。何より、大雨が続いても、風が強く吹いても、苗は倒れないかと心配だった。

二ヶ月過ぎたころは、あの細い苗とはちがい、緑色がこく、太くなっていった。倒れなくてよかった。これから先、どんなに育つのか期待でむねがふくらんだ。

秋になった。イネは黄色くなり、母が教えてくれた「実るほどこうべをたれる稲穂かな」という言葉を思い出した。一粒、一粒がしっかりしている。五年生のみんなは、さわつてにこにこ顔だ。もうすぐ稲刈りだ。最後の祈りは、台風がこないでほしいということ。

世話をしてくれた農家の人は、

「津波で、育苗センターが流され、苗がないと、あきらめかけていたが、モミから苗をおこし、どうにか田植えをすることができた。温度管理にとっても苦労した。」と話していた。とても感謝している。もうすぐ、できる米。世話よりも心配が多かった気がするが、今から楽しみでならない。

特別な米の二つ目は、「感謝の米」だ。震災後に母の知り合いからたくさんの方の支援を受けた。私が着る洋服や文房具、台所用品など、たくさん送ってくれた。また、千葉県に住んでいる人からは、梨も送られた。私の家族は、「何もお礼ができないから、新米がとれたら送ってあげたい。」

と話している。祖父、祖母が腰を痛めながら育てている米。いつも稲刈りをほんの少し手伝う私だが、今年はたくさん手伝いたいと思う。私の家では、稲刈りの後、稲をはせかけし、かんそうさせている。そうすることによって太陽の光をあげ、米はより甘くなるそうだ。おいしいお米を、食べてほしい。

米作りは、思った以上に大変だ。手間もかかるが、天気がとても心配される。最後まで気がぬけない。私にとって二つの特別な米。みんなが、おいしく食べられることを願う。

「黄金色の絆」

あ さ ぬ ま は る か
浅 沼 春 香

は な ま き し り つ や き わ ち ゅ う が っ こ う ね ん
花巻市立矢沢中学校 2年



三月十一日。東日本に住む私達を、経験したことのない大きな揺れが襲いました。私達の住む花巻は震度六弱。宮城県の県北部は震度七。沿岸地区には大きな津波が襲い、その黒い魔物は、人は勿論、車や家も一息に飲み込んでしまいました。私達は卒業生を送るための練習で体育館にいました。大きな揺れと収まることのない地震。恐怖と不安で泣きたい気持ちで一杯でした。

母が学校に迎えにきてくれ家に戻ると、部屋の本棚の物は全て床に落ちていて足の踏み場もないほどになっていました。ラジオから流れる情報を頼りに不安なまま三日間の停電は続きました。

停電ではご飯も炊くことが出来ず、祖母や母は、使うことが出来たガスと水を使い土鍋でご飯を炊いてくれました。

「炊飯器で炊いたご飯とちよつと違うね。」

ふつくらという感じより、なんかお餅に近いように感じました。「初めちよろちなかパッパ」というのを聞いたことはありますが、初めのうち土鍋のお米が炊けるのをこのことなのかなと思いつながら三日間の停電が復旧しました。沿岸地区の被災者の方々には、炊き出しやおにぎりが配られたと、テレビの映像から知ることが出来ましたが、それは充分でなく一日におにぎりが二個だけという話もありました。電気もガスも水道も、それが止まっている情報さえもなく、恐怖と不安の中でのおにぎりは、どんなに心の支えになったことだろうと思いました。

「食べられるだけでありがたい。」

その笑顔には、家族と離ればなれに避難し、その安否もわからないという不安がかくれているように見えました。不

幸にして津波にのまれ、その姿を探しに遺体の安置所を巡る人達が一個のおにぎりに元気をもらったという話に涙がこぼれました。当たり前のように食べることの出来る幸せを改めてありがたいと感じました。

この地震は福島原子力発電所にも大きな被害をもたらした。放射能が漏れるという大きな事故もありました。そのことに関連しないメディアの関係者が事件を起こしました。その事のニュースを聞き、言葉にならない大きな怒りを感じました。心や頭の中になれば、こんな中傷じみた言葉はでるわけありません。ましてや文になるわけはないと私は思いました。

謝罪にテレビ局の責任者が来県しました。パソコンでその場面を見ましたが、謝って済むのなら……と許せない気持ちは変わりませんでした。他の県の方が同じブランド名の風評被害に関わると心配していたのも、もっともな事だと思いました。

中学校での給食のお米の名前はわかりませんが、私の家ではずつと県産のひとめぼれ。パンやめんよりやっぱご飯が大好きな事を知っている家族は、一番初めに私の茶碗にご飯を盛ってくれます。

毎朝のご飯は、今日も頑張ろうというもエールを送ってくれます。

今年の夏はとても暑く、被災した東北三県のお米の作柄は『やや良』。通学路途中の田んぼの稲は黄色になり始め頭を下げ始めました。稲穂のひとつひとつが、今回の地震で被災した方やそれを支える多くの人達の協力のように私は感じました。今年のお米は、いつもの年より暖かく優しい味と思います。

「願いを込めた収穫」

なか し ま
中 寫

かるまいちようりつ こ がるまいちゅうがっこう
軽米町立小軽米中学校

かつみ
克

ねん
3年



「いただきます。」
今年ほどこの言葉に重さを感じたことがあっただろう
か。
夏場でさえ、「ヤマセ」と呼ばれる冷たい風が吹き、日照時間が短い岩手県北部。今は雑穀産地として名の知れた軽米でも、幾度となく冷害に悩まされた。実の入らない軽い米から地名が付けられたというのだから、農作物の管理はどれほど大変だったことだろう。この小さな一粒一粒は、作り手の家族であり真心である。
寒さの厳しい一月に行われる種もみ消毒、元気に育つように願いを込められ蒔かれた種が丈夫な苗になって各家庭に届けられ、田植えとなる五月までにいくつもの作業が行われる。
今年三月、巢立ちを心待ちにする芽吹いたばかりの苗を地震による津波が襲った。今年、米作りをあきらめた農家はどれほどいただろう。除塩作業を幾度も繰り返し、数日遅れでも田植えを行えた家では、休耕するしかなかった方々の分まで心を込めて作業している。
昨年より少し遅い稲穂の色づき。地震から既に五ヶ月が経過した緑色のじゅうたんから覗かれる真っ直ぐな穂は放射性物質の汚染が心配されている。精米し袋詰めされ販売を願っている農家にとって、今回の地震はあまりに大きな打撃だった。検査で放射性物質が見つかった稲はどうなるのだろう。風評被害は大きい。一本でも、一粒にでも見つければ、その県全体の米は警戒されてしまう。毎日、口にする物だから広がる不安も波紋も計り知れない。
稲の成長には、きれいな水と夏の太陽の光が欠かせない。昼と夜の温度差が大きい地域の方が「おいしい米」の栽培に適しているのだという。冷害の地でも、寒さや病気に強

くし、少しでも多くの量を生産する為に品種改良を重ね、知恵をしぼった。あらゆる努力をし、今では日本で十番目程の生産量がある岩手県。日本全体ならば三百を超える品種があると聞き、驚いた。そのすべてに安全宣言が出されてほしい。販売され食されてこそが農家の希望に繋がる。雨あがりの通学路で風にそよぎ雫を飛ばす稲穂が「頑張るよ」と言っているように見える。
ここから遠くない青森県弘前市。その地では苗が丈夫に育つようモーターアルトを聞かせているのを昨年知った。それぞれので、さまざまな工夫をして「おらほの米が一番」と思える物を作っている。黄金色に色を変え、ずっしり重く頭を垂れるのを心待ちにしている。
「いただきます」に込められた気持ちはとても深い。自然に手を合わせてきたが、そうすることがふざかしい食材だと思ふ。もちろん毎日作ってくれる人への感謝の心も失くしてはいけな。今年野菜を始め、多くの食品が出荷停止を受け処分された。処分される為に作られた物は一つもないはずなのに。そんな不幸な末路を迎えてしまった食材を想い、手を合わせる。
三百を超える品種の中から、この土地の物を選んで食してもらふことはとても難しい。
土の条件でも苗の生育は大きく違ってくるのだと知った。気象条件、育苗法は地域さまざまだが「おいしく高品質な米」を安定して収穫できるよう努力する姿は同じだと思ふ。苗作りは地域の繋がりと温もりがぎゅっしりと詰まっている。遠く離れた人達に岩手の米を手にもってほしい。そして、その縁がずっと結ばれてほしい。ごはんを握ったものが「おむすび」と呼ばれる意味がはじめて分かった気がした。

「日本人による日本人のための食べ物」

さ と う
佐 藤

みや こ し り つ せん と く し ょ う が っ こ う
宮古市立千徳小学校

あさひ
旭

ねん
3年



わたしは、今まで何も考えないで、ごはんを食べていました。ごはんはわたしたちにとって主食なので、『いつもあるもの』だったように思います。
今回、つながりがある、車が通れなくなりました。そうすると、店に品物が入らなくなりました。ごはんをたくには、水や電気がひつようです。水も電気もなかなか手にはいりにくくなり、お米をたくのもたいへんです。そのころは、食事がパンだったりカップラーメンだったりしました。それから、電気や水がだいじようぶになると、品物不足でお米を買うのが大変でした。その時は、ガソリンもなくなりガソリンも手に入らなくなっていたので、自転車歩いてお米をさがしました。
こんなに、お米がなくなることなんてなかったのです。だから、こんなにお米が、わたしたちの生活にとりいれられていたことを考えもしませんでした。
お米は、お米だけで食べてもおいしいです。いろいろなおかずとも合います。すぐわたしたちを助けてくれた。た事に、気づきました。なくなったら、たいへんでした。
お米は、自分の国で作れます。日本でできる食べ物です。わたしたちは、日本人です。日本人は、ずっとお米を食べて生活してきました。だから、わたしたち日本人の腸は、他の国の人たちより長いそうです。お米を消化するためだそうです。長いれきしで、お米にあわせた体に進化しているのだそうです。
つまり、日本にすむ人にあつた食べ物なのだと思います。それが、食べられなかった期間があつたからこそ、今回よ



くわかりました。
わたしたちが、ずっと安心してお米を食べていける日本であり続けたいと思います。

総 評

審査委員長



岩手県教育委員会
委員長
八重樫 勝

第三十六回「ごはん・お米とわたし」作文・図画コンクールに、今年もたくさん応募していただき、ありがとうございます。

今年は三月十一日に発生した東日本大震災津波によって、沿岸部を中心に甚大な被害を受けました。大切な肉親を失った人、学校が流されてしまった人など、想像を絶する大震災でした。

震災の影響もあり、応募数も激減するのではと心配しましたが、例年並みの応募でした。このコンクールに寄せる皆さんの期待は、少しも変わる事がなく、主催者・審査員一同身の引き締まる思いです。

十月に岩手県の第一次審査を行い、作文・図画それぞれ九点、合わせて十八点を全国コンクールに応募しました。

その結果、作文・図画部門においてそれぞれ優秀賞各二点、計四人が入賞しました。

上位入賞はありませんでしたが、本県のレベルの高さを全国から認められたものであり、入賞した皆さんに心からお祝いを申し上げます。

十二月に行った二次審査会において、岩手県の各賞を決定しました。入賞の皆さん、おめでとうございます。

指導された先生方、見守り励ましていただいたご

家族の皆さんにもお祝い申し上げます。

審査をして感じたことは、小中学生の皆さんがやらなければならないことがたくさんある生活の中で、このコンクールに向けて一生懸命取り組んでいることが、よく伝わってきたことです。いい作品に仕上げるために、何度も見直し、手直しをしていることが強く感じられたことです。

三月十一日に発生した大震災津波、原発事故に関連して、ごはんやお米の大切さ、食糧問題、家族の絆などが取り上げられていることが今年の特徴的なことでした。

図画では、「おにぎり」「家族・友だち」「お米づくり」の三つのキーワードから日本の主食の大切さを切々と訴えた秀作が多かったこと、表現技法も多様化し、迫力ある作品の工夫があったこと、小中学生の皆さんの主体性を大切にした作品が多かったことです。

絵を通して、皆さんがどんな生活をしているのか、将来に向けてどんな希望を持っているのかなどについても感じ取ることができました。

作文では、ごはんやお米について、農業の未来について、働くことの意義などについて真剣に向き合っている作品がほとんどでした。

特に、大震災津波、原発事故を通して、お米の大切さ、食糧の安全性等について、真剣に考えて表現していました。社会に目を向けている小中学生が多くいることに頼もしさを感じました。

よい作品をつくるためには、対象をよく見る事が大切です。そして、自分の思いが十分表現されているかどうか、見直し、推敲することが大切です。皆さんのすばらしい感性に来年も大いに期待しています。

作文部門を審査して



盛岡市教育委員会学校教育課
指導主事
及川 公子

受賞された皆さん、おめでとうございます。また、熱心にご指導いただきました先生方、温かく見守ってくださいくださったご家族の皆様に、心よりお礼を申し上げます。

さて、昨年三月の東日本大震災では、私たちの住む岩手県においても、たくさんの方の尊い生命が失われ、これまで経験したことのない大きな被害を受けました。被災した皆さんのことをいつも忘れずに、一日も早い郷土の復興を願うばかりです。

今回のコンクールでは、被害の大きかった地域から多くさんの応募がありました。震災を通して、改めて日本人の主食であるごはん・お米について、また、農業の未来について、真剣に向き合っている作品が多くありました。審査をしながら、皆さんの一生懸命さや、思いやりあふれる優しさに感動しました。

岩手県知事賞を受賞した小野寺翔吾さん（軽米町・小軽米中二年）の「米の国 日本の未来」は、米を食べてきた日本の歴史を残したいという願いが述べられています。古代米が食べられなくなった事例などを取り上げ、文章に説得力を持たせています。

岩手県教育長賞を受賞した佐藤 光さん（宮古市・千徳小六年）の「米を守る。」は、原発の被害について、生産者の立場に身を置いて考えたことが丁寧に書かれています。農業と食を守りたいという気持ち

図画部門を審査して



前岩手県国公立幼稚園協議会
会長
伊藤 満久

今年度は千年に一度と言われる大震災・大津波による被災にもめげず、本コンクールの意義を積極的に受け止め、応募された学校は、今年度初めて応募した学校も含め四十八校（応募総数二七六点）であり、うれしい限りです。

その中から全国の審査へ九点厳選して推薦しました。その結果、優秀賞に二点入賞しましたが、どちらも主題をよくとらえた作品でした。岩手から発信した感性の豊かさが高い評価を受けたものであり、今後の表現活動に更なる励みになる活躍でした。

全国の優秀賞と岩手県知事賞の越喜来小五年菊地南美さんの「田んぼの草刈り」は草刈りをしている人の動きのあるポーズや真剣な表情、力強い手等、緊張感の伝わってくる秀作です。同じく優秀賞と県教育長賞「お昼のひととき」（見前中二年伊藤菜那さんの作品）はおにぎりを食べている生徒のおだやかな表情からお米への感謝が伝わってきます。デッサンもしっかりし着色も明るい色調でまとめている品性のある作品です。

次に東北農政局盛岡地域センター長賞の「お母さんのお弁当」（越喜来小五年大津果穂さんの作品）は、弁当を作っているお母さんと笑顔で見ている子どもの交流が伝わってくるほほえましい作品です。JA岩手県五連会長賞の小松平夢愛さん（内川目小三年）の「大きいおにぎりいただきます」は迫力のある

ちが強く伝わる作品になっています。

東北農政局盛岡地域センター長賞を受賞した浅沼春香さん（花巻市・矢沢中二年）の「黄金色の絆」は、震災によるさまざまな体験と、その時々思いが素直に表現されています。食べられることの幸せや、人と人との絆を強く感じさせられます。

JA岩手県五連会長賞を受賞した佐々木恵利佳さん（陸前高田市・米崎小五年）の「特別な米」は、二つの米作り体験から、今年の米を特別に感じた理由を丁寧に書いています。学校で作った米を「自分たちが作った米」、家で作った米を、震災時の支援に対する「感謝の米」と意味づけしているところに工夫があります。

優秀賞を受賞した中島 克さん（軽米町・小軽米中三年）の「願いを込めた収穫」は、農業に携わる人々の苦労や努力に対する敬意と感謝が作品全体に貫かれています。「いただきます」という言葉の意味や重さについて触れた細やかさが目を引きます。同じく優秀賞を受賞した佐藤 旭さん（宮古市・千徳小三年）の「日本人による日本人のための食べ物」は、被災時の生活の様子を詳しく書いています。改めて、お米が日々の生活に欠かせないと実感した様子が伝わってきます。

これらの受賞作品のほかにも優れた作品がたくさんあり、どの作品も、お米をはじめとして食べられることへの感謝、私たちの生命を支える食物を作る人々に対する尊敬、お米やごはんにかかわる人々とのつながりや愛情を感じさせてくれました。

これからも、作文を書くことを通して、これらの心を豊かに育ててほしいと感じました。

【全国コンクール】

◆優秀賞

菊地 南美	大船渡市立越喜来小学校	5年	「田んぼの草刈り」
伊藤 栞那	盛岡市立見前中学校	2年	「お昼のひととき」

【岩手県コンクール】

◆岩手県知事賞

菊地 南美	大船渡市立越喜来小学校	5年	「田んぼの草刈り」
-------	-------------	----	-----------

◆岩手県教育長賞

伊藤 栞那	盛岡市立見前中学校	2年	「お昼のひととき」
-------	-----------	----	-----------

◆東北農政局盛岡地域センター長賞

大津 果穂	大船渡市立越喜来小学校	5年	「お母さんのお弁当」
-------	-------------	----	------------

◆JA岩手県五連会長賞

小松平 夢愛	花巻市立内川目小学校	2年	「大きいおにぎりいただきますーす」
--------	------------	----	-------------------

◆優秀賞

鈴木 かれん	奥州市立白山小学校	6年	「いなりずし作り」
栗津 楓夏	宮古市立赤前小学校	1年	「いったadakいまあす！」

◆学校奨励賞

大船渡市立越喜来小学校

◆佳作

中村 心羽	小鳥谷小	1年	「おいしいおこめ いただきます」	斉藤 蘭	和賀東中	1年	「お母さんのおにぎり」
下川 凜	赤前小	1年	「ごはんをあーん」	浅沼 雛子	見前中	1年	「二人で食べたお弁当」
伊藤 健太	内川目小	2年	「大きなおにぎり」	内村 有里	見前中	1年	「夏に輝く田んぼ」
齊藤 葵	北上・南小	3年	「ママのおにぎり おいしいな」	千葉 愛子	舞川中	1年	「おかわり」
				麥澤 栞奈	種市中	1年	「大好きなお米の香り」
千田 栞奈	南都田小	3年	「米とぎがんばるぞ」	佐藤 文香	見前中	2年	「おにぎりが一番」
佐藤日向子	北上・南小	3年	「ごはんのごちそう」	須田 葉月	見前中	2年	「午後から部活」
高橋璃生夢	北上・南小	3年	「でっかいぞ！おむすび」	高橋 彩歌	上野中	3年	「春の田んぼ」
菅野 陸駆	大田代小	4年	「やったあおばあちゃんの お釜ごはん」				

佐藤 理沙	小友小	5年	「お米とぎ」
武藤 陽	種市小	5年	「みんなで おいしく食べました」
村上 緑	気仙小	5年	「大きな口で食べたくなる ほっかほかのごはん」
小針 歩	青山小	6年	「おいしかった はんごうで炊いたご飯」
只野 彩華	黒沢尻北小	6年	「がんばった田植え」

【全国コンクール】

◆優秀賞

佐藤 光 宮古市立千徳小学校 6年 「米を守る。」
小野寺 翔 吾 軽米町立小軽米中学校 2年 「米の国 日本の未来」

【岩手県コンクール】

◆岩手県知事賞

小野寺 翔 吾 軽米町立小軽米中学校 2年 「米の国 日本の未来」

◆岩手県教育長賞

佐藤 光 宮古市立千徳小学校 6年 「米を守る。」

◆東北農政局盛岡地域センター長賞

浅沼 春 香 花巻市立矢沢中学校 2年 「黄金色の絆」

◆JA岩手県五連会長賞

佐々木 恵利佳 陸前高田市立米崎小学校 5年 「特別な米」

◆優秀賞

佐藤 旭 宮古市立千徳小学校 3年 「日本人による日本人のための食べ物」
中 寛 克 軽米町立小軽米中学校 3年 「願いを込めた収穫」

◆学校奨励賞

軽米町立小軽米中学校

◆佳作

菊池 飛鳥 木細工小 1年 「しおおにぎり」	熊本 隆人 北松園中 1年 「幸せをくれるごはん」
菊池美乃里 木細工小 1年 「かくしあじ」	熊谷 南美 飯岡中 2年 「『いただきます』の言葉とともに」
菊池みずき 木細工小 2年 「竹の子ごはん」	
梅原 彩奈 大田代小 2年 「おばあちゃんのごはん」	長沢 勇樹 花輪中 3年 「日常では気付かないこと」
窪田 創 越喜来小 4年 「お米本来の味」	千葉みゆき 藤沢中 3年 「ごはんとうたし」
大津 希梨 越喜来小 5年 「初めての料理はおにぎり」	菊池 亜希 綾織中 3年 「ごはんのちから」
佐藤 麻央 花巻清風支援学校	井上 麗羅 北陵中 3年 「米について」
北上分教室 5年 「小さな手伝い」	阿部 初音 紫波第三中 3年 「広げよう『お米の環』」
菊池 郁哉 木細工小 6年 「あらためて知ったごはんの力」	伊香 友稀 花輪中 3年 「お米について考えた事」
白石 山河 越喜来小 6年 「米の大切さ」	高橋 紀乃 花巻北中 3年 「一滴の水から」
菅野 映和 玉里小 6年 「おいしい食卓へ」	
菊池 洗希 木細工小 6年 「お米にこめられた	
たくさんの思い」	

第 36 回「ごはん・お米とわたし」 作文・図画コンクールの概要

応 募 点 数

学 校	作 文	図 画	合 計
小学校	25	234	259
中学校	83	42	125
計	108	276	384

応 募 締 切 日

平成23年 9 月16日

県コンクール第1次審査会

平成23年10月20日（全国コンクール推薦作品18点を決定）

県コンクール第2次審査会

平成23年12月 8 日

表 彰 式

平成24年 1 月27日 盛岡市「ホテルメトロポリタン盛岡 本館」

主 催

県下 J A ・ J A 岩手県中央会

後 援

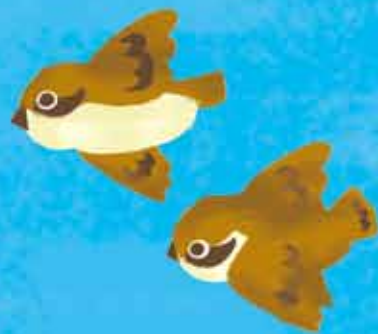
岩手県・岩手県教育委員会・東北農政局盛岡地域センター
いわて純情米需要拡大推進協議会・J A 岩手県信連
J A 岩手県厚生連・J A 全農いわて・J A 共済連岩手

審 査 員（敬称略）

審査委員長	八重樫	勝	岩手県教育委員会委員長
審査委員	伊 藤	満 久	前岩手県国公立幼稚園協議会会長
審査委員	及 川	公 子	盛岡市教育委員会学校教育課指導主事
審査委員	阿 部	天	東北農政局盛岡地域センター統括管理官
審査委員	箱 石	知 義	岩手県農林水産部流通課流通改善担当課長
審査委員	朝 倉	栄	J A 岩手県中央会常務理事
審査委員	松 本	主 悦	J A 岩手県信連代表理事専務
審査委員	小野寺	文 男	J A 岩手県厚生連常務理事
審査委員	杉 本	博	J A 全農いわて本部長
審査委員	柳 谷	敬 志	J A 共済連岩手本部長

※このコンクールに対するご意見・ご感想をお待ちしております。

JA岩手県中央会 営農農政部 〒020-0022 盛岡市大通り一丁目2番1号 TEL019-626-8522
ホームページ<http://www.ja-iwate.or.jp/> Eメールアドレス nosei-ko@jaiwate.or.jp

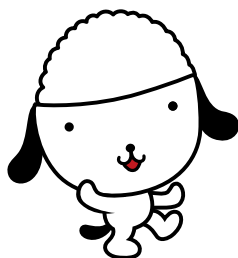


みんなの**力**で!



がんばろう!岩手

JAいわてグループ



JA岩手県中央会

発行／平成24年1月27日

企画・編集・発行／JA岩手県中央会

印刷・製本／川嶋印刷株式会社



さあ、みんなで取り組んでいこう。
やっぱり国産農畜産物推進運動
～みんなのよい食プロジェクト～